ISSN 2185-7431
Asahimachi Museum, Niigata University Newsletter No.14 March. 2017
あさひまち
新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター　2017年3月 第14号

大学史 ―大学の魅力を伝える―

新潟大学旭町学術資料展示館長　**橋本　博文**

大学の歴史を語る時、その資料をわたしの専門の考古学に例えるならば、大学全体が「遺跡」であり、その敷地内の不動産、建物・建造物は「遺構」となる。さらにその中の動かすことのできる動産である教卓、椅子、教材、掛図、教科書、大学関係書類、卒業アルバム、記念碑、銅像、実験機器、附属病院の医療機器、図書館の図書、研究データ・資料などは「遺物」であり、特に、「人工遺物」というカテゴリーに分類される。さらに植樹された木々をはじめとしてキャンパス内の管理・手入れをされた植物（例えばヒポクラテスの木）などはさしずめ「自然遺物」という概念に相当する。

医学部旭町キャンパスのゴミ捨て場に捨てられていた玳瑁（タイマイ）の剥製はワシントン条約で取引が禁止されているような代物であったが、通報を受けて展示館内に「捕獲」回収した。

工学部の大正末から昭和初期の教材である実験機器類は、全国的に見て貴重品である。今年度の博物科学会で発表のあった九州大学の什器類は歴史的な資料であり、魅力的であった。本学は旧帝国大学ではなく、それらに比べて歴史は浅いが、全国的に大学備品が廃棄され、現存していない中にあって、注目すべき資料と専門家に評価されている。

当旭町学術資料展示館の建物は、現存する新潟大学最古の建物で、新潟市域に残る最古式の鉄筋コンクリート造りの建物として国の登録有形文化財に認定されている。この建物は昭和４年（1929）築で、同じく鉄筋コンクリート造りの橋で国重要文化財に認定されている三代目の萬代橋とは同年齢である。さらに、それを遡って医学部の正門と赤レンガ塀は明治末に遡る本学最古の建造物である。

一方、退官教員の収集した研究資料・標本は、学内に安住の場が無く、廃棄されるか、学外に流失し、大学とは切り離されてしまっている現状に悲しみを覚える。大学の歴史が失われ、大学の重みが消え失せているのである。このままでは大学が浅薄なものとなってしまうであろう。

以前、新潟街中のある古美術店で火事の時に使用した鳶口を見つけた。それには彫刻刀で文字が刻まれていた。その中に「新潟医大」の文字が見出された。それは昭和22年と26年の医大火災の際に使用されたものであることを記していた。しかも、その鳶口本体の木柄の部分は、妙な格好をしており、新潟市歴史博物館の学芸員の御教示によると、軍事教練用の木銃ではないかということだった。すなわち、戦時中は軍事教練に使用されていた木銃が、戦後、消防の火消しのための鳶口に転用されたことを知ることができた。これなどは新潟大学と地元新潟市の関係を物語る本学にとっても貴重な大学史の遺産である。

現在、展示館では寄付金で大学の模型を製作中である。いつどの場所を対象とするか悩んだが、昭和30年の新潟大火直後の復興期に、先に焼失した新潟大学医学部附属病院の外来棟が新潟県民の浄財をもとに再建された時点の昭和32、33年の姿を再現することにした。この後昭和39年、新潟地震でキャンパスは、旭町と五十嵐に分離することになるが、それ以前の本部・医学部・教育学部・理学部・人文学部の集中したキャンパスであった。再現に当たって、古地図・絵葉書・空中写真・記念誌などを手掛かりに、本学医学部卒業生である蒲原宏先生らからの聴き取りを行った。語り部である93歳の蒲原先生は本学や医学界にとって正に無形文化財のような方である。

企画展示 exhibition

砂丘展

人文学部　橋本　博文

はじめに

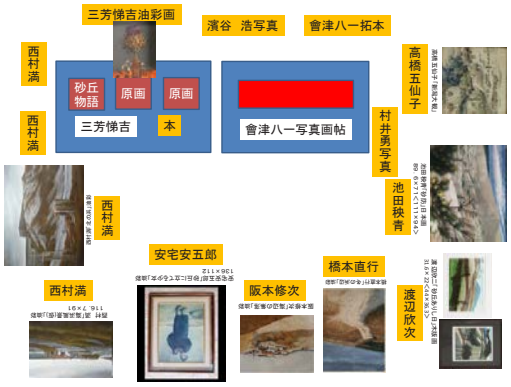
「新潟の魅力は？」と聞かれたなら、わたしは「新潟砂丘！」と答えるだろう。新潟の地は日本海と季節風の織り成す砂丘とその間の砂丘間低地に滞水した潟とから形成されていると言っても過言ではない。『水と土の芸術祭』に相応しい対象物として「砂丘」を取り上げ、新潟砂丘の魅力を全国に発信しようと思い立ち、市民プロジェクト枠に手を挙げた。

この砂丘の絵に興味を持ったのは、東日本大震災の直後に入手した池田秧青の「砂防」という大きな日本画作品に遡る。それはわたしの通勤路の海岸風景と瓜二つだった。しかも、その水損の様子が津波の中でも生き残ったように思え、絵の中の小さな花が砂防の松苗に守られて生き長らえている姿と被災者の姿とが重なって、いたく感動したものである。

「にいがた砂丘」絵葉書

1 展示構成

最初、集めた作品の中から新潟砂丘と直接関わるものと、それ以外のものとに分けた。「新潟砂丘」のコーナーは前期を本学所蔵の安宅安五郎の作品、後期を新潟市美術館所蔵の三芳悌吉の作品をメインに、本学教育学部美術科出身の西村満氏の作品を多くお借りして中核とした。さらに、『砂丘物語』の作者であり、若いころ本学医学部の前身の医専の顕微鏡画の技師をされていた三芳悌吉の『砂丘物語』の原画を新潟市歴史博物館から借用して『ある池のものがたり』などの本と共に展示した。さらに、砂丘に因む會津八一の歌碑の拓本や砂丘に立つ八一を写した濱谷浩の写真などを會津八一記念館から提供していただいた。



新潟砂丘コーナー展示構想

2 絵葉書の製作

絵葉書は『にいがた砂丘』をテーマにし、油絵で安宅安五郎・阪本修次・富田徹・西村満・橋本直行、版画で渡辺欣次・品川工（たくみ）、写真で村井勇を選んだ。

絵葉書が出来上がって後、許諾をいただいた関係者にお配りしたところ、思いがけず品川工氏のご遺族からご丁寧なお手紙を頂戴した。その中には絵葉書にした作品に関する新潟日報記事の情報が記されていた。それは絵葉書に添えた拙稿を補強する内容の記事だった。すなわち、品川工氏の抽象作品は故郷の新潟をイメージして作られたというものであった。

3 コンサート

ソプラノ歌手、笹原美香さんによる砂山コンサートを開催した。笹原さんは本学教育学部声楽科の卒業生である。新潟砂丘を詠んだ北原白秋の「すなやま」を聴いた。ピアノ伴奏には九州熊本の御友人である岩下周二さんが遥々駆けつけてくださった。「落葉松（からまつ）」が特に感動的で素晴らしかった。

コンサート風景

前期ギャラリートーク

4 前期ギャラリートーク

作家の一人、西村満さんによるギャラリートークを実施した。当日は西村ファンが大勢詰め掛けた。西村さんは、自身の作品がどのようにしてできるのかを現地でのスケッチ画を手に熱く語った。ご当人によると、取材はいつも季節的には厳しい晩秋から初冬にかけてだそうである。

5 後期ギャラリートーク

企画者である橋本が列品解説した。企画の経緯や作品集めの苦労話、展示構成などを語った。

橋本の解説の前に、美術研究家の山浦健夫氏が安宅安五郎の「砂丘に立つ子供」の絵のモデルとなった実在の人物について詳細に解説して下さった。

西村満さんの太陽の光が射さない新潟独特の鉛色の空、強風の吹き荒ぶ暗い海浜風景には、新潟のイディア（本質）が凝集されている。兵庫の阪本修次さんが描いた明るい「海辺の集落」の作品や寺泊の橋本直行さんの描いた青みがかった鈍色の雲間から陽光の漏れた瞬間をとらえた明と暗の対比のうかがえる「冬の浜辺」の作品とは対照的な暗さである。一方、もう一つ、富田徹さんの絵は色彩の美しい魅力的な作品である。また、渡辺欣次さんの素朴で郷愁をそそる版画作品や村井勇さんの奥深い精神性の込められた写真作品に言及した。

後期ギャラリートーク

6 ワークショップ

教育学部美術科の日本画、永吉秀司准教授が子供たちを相手に制作指導した。透明なガラスコップの中に多肉植物を入れ、その根の周りに色砂を幾重にも入れて、その色の重なりを楽しむもので、どれ一つとして同じものができないオリジナル性をみんなで鑑賞した。最後に完成した作品を手に玄関先で記念写真を撮った。

ワークショップ

おわりに

なお、埋め草に拙い素人の写真を会場の外に高橋五仙子の画集印刷物と共に展示させていただいた。この写真は自宅近くの通勤路沿いにある小針浜の今は無き風景である。展示準備期間に撮りためていたものであるが、現地は会期前に壊されて現在は人工的な何の変哲もない堤防のような景色になっている。モノクローム写真は元同僚であった榎本千賀子さんに選んでいただき、プリントしてもらったものである。芸術作品とはとても言えないもので、記録写真として見ていただきたかった。撮影地を示した地図を添えさせていただいた。

企画展示 exhibition

開催期間：2015年11月７日(土)～12月11日(金)

鶴田逸亭先生遺作展 をふりかえって

教育学部　角田　勝久

2013年の９月に61歳の若さで急逝された新潟大学教育学部教授・鶴田逸亭（本名・一雄）先生の遺作展が、昨年の11月７日から約１ヵ月間、旭町資料館を会場に開催されました。先生の遺作展はすでに新潟と、先生の故郷である長崎県佐世保で開催されていますが、旭町資料館長橋本先生の御高配により３回忌に近い時期に遺作展の開催が叶いました。

御蔭様で県内はもとより東京や埼玉など、遠方から多数御来場いただき、心から有難く思いました。これもひとえに鶴田先生のお人柄、誰にでも隔たりなく優しく接してくださった先生の人徳によるものと思います。

先生は超多忙をきわめられていたご研究の合間をぬって多くの書を制作され、その作品を毎日書道展や東京書道会展等に発表しておられました。今回の展示では温厚で実直だった先生のお人柄そのものといえる

書20点余りを中心に、加えて先生が生前蒐集されていた多数の書画や中国の古美術品の一部も展示しました。先生が蒐集した名品を先生の許可なく「逸亭コレクション」と名付け、展覧会のタイトルも「鶴田逸亭先生遺作展―逸亭コレクションとともに―」としましたが、先生のことですから多分大目に見てくださるだろうと思います。御覧になられた方からは作品だけでなく、コレクションからも先生のお人柄がうかがえると大変好評でした

また期間中には先生の御令室・邦子様にご参加いただき、ギャラリートークを開催しました。御家族のみが知りえる、逸亭コレクションの成立過程など、ユーモアを交えながら語っていただき楽しい時間となりました。展覧会やギャラリートークなど多くの方々にご覧いただけたので、鶴田先生もいつもの笑顔をうかべながら、さぞ喜ばれていることと思います。橋本先生をはじめ、御協力いただいた関係者の方々に深くお礼申し上げます。有難うございました。

企画展示 exhibition

開催期間：2015年12月23日(水･祝)～2016年１月21日㈭

中田瑞穂 俳句絵かるた製作・原画展

教科教育専攻美術教育専修卒業　**小柳　悠未**

お話をいただいたのは2014年の春頃でした。企画された人文学部の橋本博文教授より主旨を伺い、私が在籍していた日本画研究室の永吉秀司准教授より折角ならば大学関連で形に残るものに携わるのもいいのではないかとお声がけいただきました。当時の私は「勉強になる」という気持ちと47枚を一人で描くことに「自分に務まるのか」という不安を感じていました。

いざ画の制作に取りかかると量の問題よりもまず元になるかるたの内容を把握し読解することに大変苦労しました。中田瑞穂先生が生きた時代を考えれば知りえぬ情報が多いのは当たり前のことですが、それに加え中田先生が目で見た事実や経験を詠った俳句も多数ありました。当時の様子を書籍や白黒の写真を調べて描き、人文学部の中本真人准教授に第一次チェックをいただきました。更に中田先生の教え子である蒲原宏先生に最終監修をしていただきました。蒲原先生は多忙な中全ての下図に丁寧なご回答、コメントをくださり中田先生が何を見聞きし感じてその俳句を詠んだのか伝えて下さいました。特に印象に残っているのは中田先生がスイスの山を登山する外国人夫婦の姿を見て詠んだという句や、当時流行した映画について取り入れた句です。日常の場面やユーモアに富んだ表現で詠われた俳句の意味を知り、画を描くために必要なピースが埋まりました。

画の制作と旭町展示館での原画展を行うにあたり永吉准教授をはじめ多くの方々にご協力・ご指導いただきました。医学、人文、教育学部の繋がりから実現したこの企画について、私は総合大学で美術（日本画）を学んでいたからこそ経験できたことだと思います。貴重な企画に携われたことを誇りに感じます。

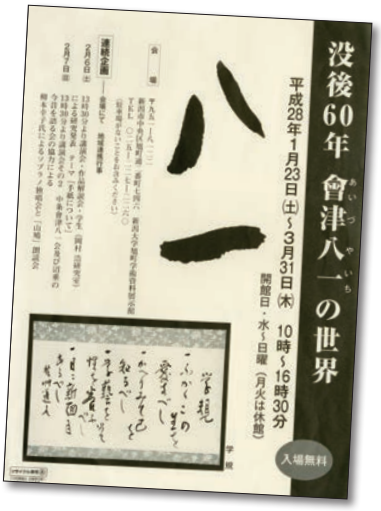
企画展示 exhibition

開催期間：2016年１月23日㈯～３月31日㈭

没後60年 會津八一の世界

教育学部　**岡村　　浩**

新潟市名誉市民・早稲田大学名誉教授・文学博士等、本県の生んだ文化人。昭和31年75歳で没し、60年が経つ節目を迎えての企画である。会場の性質上、ガラスケース越しではなく、直に詩歌句の書画肉筆が鑑賞出来る、無上の贅沢さの提供となった。特に展示の狙いとしたのは、



○養女きい子の没後60年に当たる、平成26年に胎内市に建った八一歌碑資料と、きい子と八一の関係
○未公開作を中心とする若書きから晩年作までの陳列
○手紙文にみる日常書の魅力

の三点。計約50点。会期中「地域連携行事」と銘打ち、学外から「沼垂の今昔を語る会」と「中条會津八一会」の皆さんから話題提供を頂き、ソプラノ歌手・柳本幸子氏から独唱に加えて八一のきい子挽歌『山鳩』朗読を、さらに研究生・佐藤綾香氏からは手紙に関する学習会講師をお願いした。

せっかくの機会、授業の一環としてGコード課目「日本文化論」等、受講生に見学を促したこともあり、多数幅広い年代の来館者を得て、本館主催行事の中でも特色あるものになったと思われる。

企画展示 exhibition

殻がつくる世界

開催期間：2015年７月11日㈯～８月28日㈮

理学部地質科学科　**椎野　勇太**

―私は、海辺で遊んでいる少年のようである。ときおり、普通のものよりもなめらかな小石やかわいい貝殻を見つけて夢中になっている。真理の大海は、すべてが未発見のまま、目の前に広がっているというのに。（アイザック・ニュートン）―

新潟の海岸には、砂浜や小石の転がる礫浜、磯のような岩礁地など、大海に思いを馳せたくなるような景色が広がっています。どこも無機的な景勝地的風景に見えるかもしれません。しかし、足元に目を向けて丹念に散策してみると、多彩な生き物の殻が打ち上げられていることに気づくでしょう。2015年の夏に新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」で開催した企画展示「殻のつくる世界」は、今も昔も人々を魅了する生命の「殻」を題材に、生き物のつくる造形の面白さを紹介しました。

新潟県五十嵐浜で採集された殻、糸魚川ジオパークで採集された化石の殻、佐渡市の海で採集された海洋生物の殻など多種多様な標本を展示しました。また、企画展示の期間中には、子どもたちを対象にしたふれあいトークなどの体験イベントに加え、新潟大学と新潟県内の文化系施設やジオパーク等をつなぐスタンプラリーを実施しました。

生命のつくる殻は、多様性を知る身近な題材であり、進化を記録する証拠でもあります。子供たちの「この貝ほしい」、大人の方々の「こういうの見るとわくわくする」といった声は、世代も時代も学問的背景にさえも依存しない、誰もが内包する知的好奇心の顕れなのかもしれません。

新潟大学 あさひまち 学術資料展示館　新潟大学 旭町学術資料展示館 友の会

上越の博物館と釜蓋遺跡周辺を巡るバスツアー

… 米一合は約何粒？ …

開催日：2015年11月３日㈰

旭町学術資料展示館　友の会　**藤田　昌宏**

2015年、４月にオープンした釜蓋遺跡をメインに上越市周辺の博物館企画展と盛りだくさんの遺跡を巡るバス旅行に参加しました。

釜蓋遺跡公園で撮影

●上越市立総合博物館 生誕記念 前島密展は、明治という時代の体質で、前をのみ見つめながら歩んだ結果、日本の郵便事業を起こした人で、幕府の役人から明治政府に採用され活躍したことを知りました。展示は官職が上がる毎に見やすくまとめられていました。●小林古径記念美術館『日本画と洋画』では、描き方を工程毎に比較して違いを展示してあり、絵を鑑賞する際、その下地に何色があるか考えるのが楽しくなりそうです。●小川未明文学館では沢山の童話を書いた中で、『赤い蝋燭と人魚』など、上越を題材にした作品が多いようで、モデルのろうそく屋が現存していたそうです。●上越市釜蓋遺跡 小島ガイダンス施設長さんのお話では遺跡より26万粒の炭化したもみ米が発見され、これを元に稲にすると、65～200人を一年間養えること、米一合が約7500粒であること、握り寿司一貫が230粒とクイズ形式で教えて頂きました。遺跡は約1800年前の弥生時代終わりごろから古墳時代初めごろにかけての集落跡で、2008年に国の史跡に指定され、これから発掘が本格化します期待してくださいとの熱いお話がありました。その後、小雨の中、発掘現場を見学しました。●斐太遺跡は息を切らして登る程の急な坂の上にあり、弥生時代の凹んだ竪穴建物跡群を肉眼観察することができました。●片貝縄文資料館は廃校となった片貝小学校にあり、特に大量に大小の土製耳飾りがあり、石棒、石冠、岩板なども数多く展示されていました。●泉縄文公園は、中央に木柱列がある小山や、ストーンサークル広場などもあり、縄文時代を感じられ、小川を勢い良く流れる水の音と美しい妙高山を眺めながら安らぎを感じました。■最後に釜蓋遺跡も入る斐太遺跡群が北陸新幹線上越妙高駅から150mの場所にある利点を最大限発揮して首都圏から日帰りで遺跡教育の場になることを期待したいと思います。

昼食の『釜ぶた弁当』

平成27年度 あさひまち展示館 活動記録

あさひまち展示館企画展示

開催期間	タイトル	展　示　室	担　当
2015.2.28～5.10	ギリシャ彫刻NEO －石膏像・模写・復元－	企画展示室	教育学部
2015.6.10～7.12	戦争の記憶－戦後70年をむかえて－	企画展示室	人文学部
2015.7.18～10.11	砂丘展	企画展示室	人文学部
2015.9.19～10.11	地学実験Ａ実習発表展	企画展示室	人文学部
2015.11.7～12.11	鶴田逸亭先生遺作展 －逸亭コレクションとともに－	企画展示室	展示館
2015.12.17～ 2016.1.21	中田瑞穂絵かるた原画展	企画展示室	教育学部
2016.1.27～3.31	没後60年・會津八一展	企画展示室	教育学部
2016.2.19～3.20	新潟大学あさひまち展示館の雛まつり	２Ｆロビー	展示館
2016.3.24～4.17	花見展－浮世絵・版画を中心に－	企画展示室	展示館

あさひまち展示館　サテライト・ミュージアム 駅南キャンパス「ときめいと」企画展示

開催期間	タイトル	担　　当
2015.5.20～6.28	苗場山麓ジオパークの魅力	理学部
2015.7.11～8.28	殻がつくる世界	理学部

友の会行事

開 催 日	テーマ	講　　師
2015.6.6	第13回新潟大学あさひまち展示館友の会　総会	
2015.11.3	バス見学会 上越市斐太遺跡群(吹上・斐太・釜蓋遺跡)・片貝縄文資料館など	橋本博文館長

フォーラム・講演会

開 催 日	タイトル	講　　師	会　場
2015.4.11	ギリシャ彫刻NEO関連シンポジウム「石膏像のこれから－今日の美術における模写、模倣再考－	田中咲子教育学部准教授、金井直信州大学人文学部准教授、永吉秀司教育学部准教授、木本諒東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター特任助教	中央図書館B棟ライブラリーホール
2015.6.6	第13回新潟大学あさひまち展示館友の会総会 記念講演会「新潟砂丘－生い立ちと越後平野形成との関わり－」	坂井陽一(新潟古砂丘グループ会員)	ときめいと
2016.2.6～7	没後60年・會津八一展講演会１，２、学生による研究発表「手紙について」	岡村浩新潟大学教育学部教授、中条會津八一会及び沼垂の歴史を語る会	企画展示室
2016.3.13	東日本大震災5年の節目にあたって 被災文化財レスキューの現状と課題	古川一明(東北歴史博物館学芸課長)	ときめいと

ギャラリートーク・体験教室

開 催 日	タイトル	講　　師	関連企画
2015.6.28	ギャラリートーク	橋本博文人文学部教授	戦争の記憶－戦後70年をむかえて－
2015.7.26，9.6	ギャラリートーク	西村満(画家)、橋本博文人文学部教授	砂丘展
2015.8.1	体験教室「色砂DEアート」	永吉秀司教育学部准教授	砂丘展
2015.8.9	ギャラリーコンサート	笹原美香(ソプラノ独唱・新潟大学教育学部卒)、岩下周二(ピアノ演奏)	砂丘展
2015.11.15	ギャラリートーク	角田勝久教育学部准教授、鶴田邦子(鶴田逸亭夫人)	鶴田逸亭先生遺作展 －逸亭コレクションとともに－
2016.2.6	ソプラノ独唱会と「山鳩」朗読会	柳本幸子(ソプラノ独唱)	没後60年・會津八一展

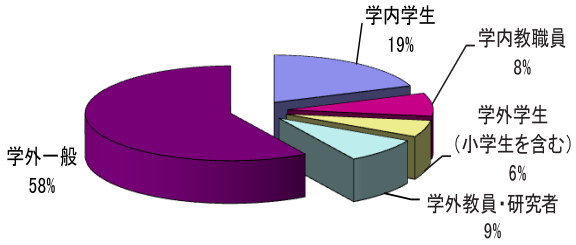
あさひまち展示館入館状況

◆入館者数

（2015年４月～2016年３月）

月	学内		学外			計
	学生	教職員	学生	教員研究者	一般	
2015年4月	32	32	28	32	151	275
5月	26	28	2	22	142	220
6月	13	20	11	20	142	206
7月	180	31	36	31	273	551
8月	17	26	70	39	253	405
9月	36	22	5	36	208	307
10月	118	42	40	41	340	581
11月	27	34	23	57	201	342
12月	30	18	10	20	227	305
2016年1月	214	25	0	22	200	461
2月	112	24	5	18	167	326
3月	1	26	7	22	142	198
計	806	328	237	360	2,446	4,177
	1,134		3,043			

※開館日：水・木・金・土・日曜日の週5日間



◆団体入館者

日　付	団体名	人数
2015年5月17日	新潟大学考古学研究会	13
2015年6月26日	新潟市立白新中学校2年生	8
2015年7月29日	石山チャレンジクラブ	20
2015年7月25日	篆刻会書道会同人会	15
2015年7月30日	相川考古館関係者のみなさま	15
2015年11月4日	新潟市立下山中学校2年生	9
2015年11月8日	新潟まち歩き「えんでこ」のみなさま	18
2015年11月12日	新潟市白山小学校6年	9

◆講義・実習等での活用

日　付	講義・実習名	受講者数
2015年4月18日	「われらの地球」/放送大学面接授業	25
2015年7月11日	地学実験Ａ/理学部	17
2015年7月12日	考古学概説Ａ/人文学部	30
2015年９月３日	文化財保護論/人文学部	17
2016年1月10日	歴史学F･日本文化起源論/人文学部	21
2016年1月23日	歴史学F/人文学部	53
通　　年	博物館見学実習	50

◆資料受入リスト贈

資料名等、受入年月日、受入種別			
大東亜決戦画集	図書	2015年7月23日	寄贈

新潟大学旭町学術資料展示館ニューズレター
あさひまち　第14号

◆ISSN 2185-7431
◆発行年月日／2017年３月31日
◆編集・発行／〒951-8122 新潟市中央区旭町通2番町746
新潟大学学術情報基盤機構旭町学術資料展示館
◆印　　刷／共立印刷株式会社

編集後記

当館の事業記録を掲載し発行しているニューズレターの14号をお届けします。発行が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。引き続き次号発行準備中です。

今号掲載の幾つかの催しは「書」に関連しています。多くの書家を産んできた「書王国」新潟。本学関係者による活動も、その流れに連なるものでしょう。これは一例ですが、当館企画を通じて、日頃意識しにくい本学の強みや地域の特色といったものを感じることができるのではないでしょうか。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。